

連続公開学習会

「吉田寮と京大」学

にご参加ください!

私たち「21世紀に吉田寮を活かす元寮生の会」は、京都大学の学生寄宿舍で今年創建108年になる「吉田寮」の元寮生の世代を超えた交流と、吉田寮が歴史的に果たしてきた教育的役割が21世紀にいつそう発揮されることを願って2017年10月に発足しました（さらに広く元寮生・市民の皆さんの参加や協力を呼びかけています）。

このたび、吉田寮と京大をめぐるさまざまな話題について、現寮生・学生・教職員および市民の皆さんと学び合う場として連続公開学習会を開催することになりました。第1回「最近20年間の大学自治」（2019年10月5日）、第2回「『吉田寮百年物語』を読む（その1）」（2019年11月17日）、第3回「地域のなかの吉田寮～景観と地域らしさから考える」（2020年1月18日）、第4回「地図に見る百年前の吉田寮境界～「大学と学校のまち」吉田地区の近代を考える～」（2020年8月29日）に続き、第5回を以下のように開催いたします。

第5回：「戦前期吉田寮のアジア人留学生」

日時 2021年8月29日（日）14:30～16:00

オンライン（ZOOM）で開催します。ただし、先着12名まで会場での参加も受け付けます（京都教育文化センター203 会議室 東山近衛東入ル。市バス「熊野神社前」下車徒歩3分。京阪「神宮丸太町」下車徒歩3分）

会費 無料

話題提供 盛田良治さん（元寮生・近畿大学非常勤講師）

戦前、京都帝国大学の学生寄宿舍であった吉田寮には、東アジア出身の留学生が、卒業生に限定しただけでも少なくとも29名在寮していたことが判明しています。彼らの留学と吉田寮での活動、卒業後の活動を中心に、当時の時代背景を含めて考えます。ふるってご参加ください。

参加申し込み 8月27日までに「お名前、ご希望の参加形態（ZOOMでのオンライン or 会場参加）」を下記の事務局へメールまたは電話でご連絡ください。ZOOM参加の方へは、ご連絡後24時間以内に参加情報（URLなど）をお知らせします。会場参加は先着12名までです。

主催 21世紀に吉田寮を活かす元寮生の会

事務局（問い合わせ先）〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学教職教育部 富岡勝研究室

TEL：090-3707-5624 e-mail：tomiokamasa@kindai.ac.jp / HP：<http://yoshidaryo.wp.xdomain.jp/>

歴史話 こぼれ

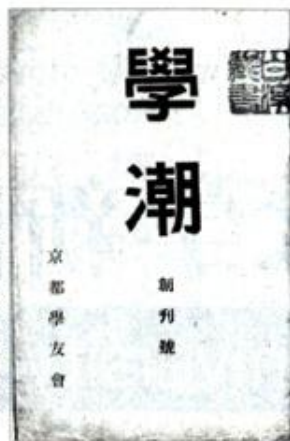
戦前期

吉田寮の留学生事情

「元・中華民国(台湾) 總統の李登生(生)であることが確認できる者は、少くとも27名。出身地の内訳は中華民国(中国)が15名、当時は日本領であった朝鮮が5名(創氏改名と思われ、崔景烈などの著名人は、その代表だろう。大農学部農林経済学科入学から翌年、湾が4名、満州国2名、関東州1名で、さらに水野直樹氏らの近年の研究に12月の学徒出陣による中退までの間、吉田神社近くの「日独寮」起居してあった。学部で多いものは法学部11名、工学部6名、経済学部4名である。さらには水野直樹氏らの近年の研究にいたことを後年の回想などで語っている。当時の京都帝大に留学したアジア人学生は、日本人学生以上に狭き門を突破したエリートであり、特に日本の植民地だった朝鮮・台湾の留学生の多くは、植民地住民の地位や生活の向上を願っており、場合によっては統治機関に職を得た。卒業生のうち京大化学研究所教授を経て戦後にはノーベル化学賞候補となった李泰圭、台湾人として先となっている。

1913〜1949年に京大を卒業した留学生のうち、吉田寮生(寄宿舎)は初めて植民地台湾の司法官となった黄炎生、朝鮮総督府の土木技師を経て戦後はソウル特別市の副市長となった崔景烈などの著名人は、その代表だろう。さらには水野直樹氏らの近年の研究によれば、当時の吉田寮は単に帰国後エリートとなるべき人たちを育てただけではなく、故国を離れた学生たちが同胞との交流を温める場でもあった。1915年に結成された京都朝鮮留学生学友会は、26年から機関誌『学潮』を発行するのだが、その発行所は「帝大寄宿舎」こと吉田寮であり、当時寮生であった民族運動家・宋乙秀が連絡先となっている。

吉田寮が京都「帝国」大学の寄宿舎だった以上、吉田寮もまた当時の「帝国」日本の縮図たるを得なかったということがある。吉田寮で青春の一時期を費やしたアジアの若者たちは、その経験をどのように故国に持ち帰ったのだろうか。



「学潮」創刊号の表紙(復刻版、京大人文科学研究所所蔵)



寄宿舎の留学生宛ての送金について書かれたページ(「学潮」復刻版、京大人文科学研究所所蔵)